

会 派 名	飯田市議会公明党	支出伝票No.	
事 業 名	玖珠町における「人工衛星データを栽培管理に活用したブランド米「くす天空の輝き」の生産の取組」を学ぶ		
事業区分 (該当へ○)	①調査研究費 ②研修費 ③広報費 ④広聴費 ⑤陳情等活動費 ⑥会議費 ⑦資料作成費 ⑧資料購入費 ⑨人件費 ⑩事務所費		

(1) この事業の目的：どんな課題を解決するため あるいは誰・何を対象に何を意図するのか

玖珠町は令和7年度から人工衛星データを栽培管理に活用した町独自のブランド米「くす天空の輝き」の生産を開始した。
米農家の所得向上や担い手の確保が全国的な課題となっている中、どの様な取組を行っているのか学ぶ。

(2) 実施概要

	日時	訪問先・主催者等
	令和 8 年 6 月 29 日 14 時 0 分 ~ 16 時 0 分	訪問先：大分県 玖珠町役場 主催者：玖珠町 農林課 柳井田 博隆 課長（農業委員会事務局長） 農政班 河野 裕司 主幹 松園 敬心 主査 みらい創生課 政策・SDGs推進室 鶴窪 秀夫 主幹
調査・研修の場合の実 施日時と訪問先・主催 者		

報告内容・実施したこと	1 視察先（市町村等）の概要
	人口：13,298人（令和8年5月末現在） 概要：玖珠町は大分県の西部に位置し、総面積は286.6km ² 、県全体の4.5%を占めている。九州では第一の河川である越後川の上流、玖珠川が東西に貫流し、落差が大きい三日月の滝、清水瀑園をはじめ滝や湧水地が随所に見られる。 また、玖珠盆地を取り囲むように我が国最大の二重メーサー台地の万年山、伐株山、岩扇山、鏡山がそびえ、北境に接して取馬溪、南境には九重連山さらに東方には4千ヘクタールに及ぶ日出台原野が広がり、豊かな山なみの懷に抱かれているような印象を受ける。 町内にはJR久大線が通り、主要幹線道路として東西に大分自動車道、国道210号、南北には国道387号がとおり、福岡・九州・熊本へ90分圏内大分市には60分圏内に位置する交通の要衝となっている。
	2 視察内容
	●農地を守り、農家所得を上げる！ 小さな町の大きな挑戦！ 人工衛星生育管理米『くす天空の輝き』（玖珠町生まれ 高冷地そだち） 1. 「くす天空の輝き」取組の概要 ■目的 ・人工衛星データを活用し高品質のお米を安定的に生産することで、玖珠米のさらなるブランド化を図り、農家の所得向上を目指す。 ■①取組の経緯 ・米価格の低下（R4概算：30kg6,000円）により、水稻生産の持続可能性に危機感を持つ。

- ・町長の発案によりブランド米の創出による認知度向上、農家取得の向上を目指すためのプロジェクトを開始
- ・大分空港の宇宙港プロジェクトと連動し人工衛星を活用した先進的な米づくりの検討を開始。
- ・青森県の「青天の霹靂」で使用されている晴天ナビの事例を参考に現地視察を実施。
- ・令和7年に「くす天空の輝き研究会」を発足し、システムを活用した水稻栽培開始（会員26名）

■②衛星データを活用しての栽培

- ・（株）ビジョンテックの「AgriLook（アグリルック）：水稻補助農業情報提供サービス」を利用。
- ・「AgriLook（アグリルック）」…人工衛星技術を用いた営農支援システムで、日々刻々と変化する作物の生育状況や栽培環境を的確にモニターし、高品質な農作物を効率的、安定的に生産するための農業をサポート。利用に必要なのはインターネットにつながるパソコンやスマートフォン等で、Webサイトにアクセスすると、生育状況マップ、気象メッシュ情報、栽培履歴データベースの閲覧やデータ登録が可能である。
- ・この衛星データを活用し「生育管理」を行い、圃場ごとに米の一番良い状態の刈取り適期を生産者に知らせる、適期に刈取ることにより、水分が適量で胴割れしていない均一の米が収穫できる。
- ・人工衛星・気象データからのタイムリーな情報や集計された記録を活用し、年間を通じて圃場の「今」を把握することが可能である。

■③くす天空の輝きの生産基準と条件

【生産基準】

- ・玖珠町に住民票または住所を置く法人等が玖珠町内の農地で生産した米
- ・特別栽培米
- ・JA米（種子更新、生産履歴が明確であること）
- ・品種は「ひとめぼれ」

【条件】

- ・特別栽培米（JA栽培基準）であること
- ・農産物検査…1等米 であること
- ・玄米たんぱく質含有量の低いお米であること

【販売基準】

- ・粒圧2.00mm以上（大粒な米）※玖珠米は1.85mm以上
- ・精米後、真空パック包装する

2. 「玖珠米」（品種：ひとめぼれ）について

■水稻栽培に適した土地

- ・令和5年度の大分県17市町村の米の全品種一等米比率は平均50%。玖珠町の1等米比率は大分県トップの82%と米づくりに適した、「土」・「水」・「気候」の3条件が揃った地域。

■寒暖差が大きい（玖珠町生まれ、高冷地育ち）

- ・玖珠町は、夏に全国でも最高気温の常連の日田市、冬はスキー場を有し、九州最高峰の九重連山がそびえる九重町などに隣接した年間・日間の寒暖差が大きな町。
また、世界的にも珍しいメサ・ビュート地形の山々に囲まれた「盆地」地形で、出穂後の一番甘みをつける夏以降は、昼は30度を超えるが、夜は10度台と日間差が大きいのも特徴。
激しい寒暖差は天然のマッサージとなり、お米に栄養を溜め込むため甘みが強いとわれている。

■九州最大の河川 筑後川の上流の綺麗な水で育てられた米

- ・筑後川の上流に位置し、九重連山や万年山から染み出た、綺麗な水で育てられている。

■平成の大嘗祭米、JA九州クルーズトレイン ななつぼし in九州

- ・平成の大嘗祭（主基殿【玖珠町】 悠紀殿【秋田県五城目町】）に選ばれたお米で、JR九州の豪華列車ななつぼしでは、2013年10月の運行当初から、食材として使用されており、美味しさは既に折り紙つきであり、日本穀物検定協会が実施する、米の食味ラン

キングでは最高位の「特A」を連続で獲得し、令和6年産は全国で唯一ひとめぼれの特A米となっている。

3. ブランド米づくりの目的（農家所得向上）

■米消費量・取引価格

【1人1年当たり米消費量】

・昭和37年（118.3kg）⇒平成2年（70kg）⇒令和2年（50.7kg）

↓日本人の米消費量の減少

↓

■米の価格

【米の買取価格（30kg）】JA⇒農家

・令和4年産 特別栽培米（6,100円）※令和3年産 6,700円 令和2年産 7,100円

↓農家所得の減少。米生産は人件費が見込めず赤字。耕作放棄地も増加

↓

『★ポイント』

米生産農家の米代を、玄米30kg 10,000円を目指すため、大分空港で宇宙港の取組が行われていたことに着眼し、玖珠町では米の生産に、衛星を活用したAIシステムを活用し、玖珠町の新たなブランド米（安定した美味しい米）づくりの取組の始まり

4. 「くす天空の輝き」とは

■ネーミング

・「天空」は、地表を見守り続ける太陽や人工衛星を。

・「輝き」は、秋に収穫されるお米の黄金色をイメージ。

■生産者【くす天空の輝き（良食味米）研究会】

・くす天空の輝きの生産者は、良食味米づくりや、安心・安全な米づくりの研修を行い、仲間と切磋琢磨し、米づくりに情熱を注ぐ「熱！農家集団」が生産。会員：26名（令和7年度）

【令和7年度 九州のお米食味コンクールin宮若 自治体部門第3位 九州各県1,205検体が出品】

■「くす天空の輝き」とはどんな米

・水稻農家は長年の経験で、これまで、追肥、刈取日を決めていたが、客観的な根拠である衛星データを活用する事により、「農家の匠（経験）」に「最新技術」を掛け合わせて生産した、『玖珠米』を、更に以下の約束事を付け加え、厳選した米を、『くす天空の輝き』と呼ぶ。

・概要

- ① 衛星データを活用し「生育管理」を行い、圃場ごとに米の一番美味しい刈り取り適期を生産者にお知らせ。（適期に刈り取る事により、水分が適量で胴割れしていない、均一のお米が収穫できる。）
- ② JAおおいたの農薬・化学肥料基準をクリアし、栽培履歴を記録した、「安心・安全の特別栽培米」
- ③ 農産物検査1等米（検査機関：JAおおいた）
- ④ たんぱく含有量の低い米を厳選（食味検査：JAおおいた）
（たんぱく質の少ない米は粘りがあり、甘くおいしい味覚となる。）
- ⑤ 通常の玖珠米、1. 85mm以上の粒厚を、2. 00mmのふりいにかき、大粒な米のみを選ぶ。
- ⑥ 精米したての風味をお届けするために、真空パック包装で販売。

5. 「AgriLook（アグリルック）」水稻補助農業情報提供サービス

■（株）ビジョンテックの開発した「AgriLook（アグリルック）」の活用

・アグリルックは、効率的に高品質な「米」を安定的に生産するための人工衛星を利用した農業ITシステムで、効率的な精密農業を実現する。

■システム概要

・人工衛星からタイムリーな情報や集計された記録を活用し、年間を通じて圃場の「今」を把握する。

・衛星で調べた生育トレンド情報により生育の早さや葉色の変化など生育状況が分かる情報が得られる。

	・生育トレンドを見ながら必要に応じて中分解能衛星データを取得し、圃場単位の葉色マップ、食味マップを作成して施肥管理、病害虫・気象災害対策、区分収穫などに利用することにより、時系列的・空間的栽培管理を実現する。 6. 今後の取組 ■くす天空の輝き、そして玖珠町のブランド化 ・くす天空の輝きをブランドとして全国に認知を目指し、更に現在販売されている玖珠米、更に玖珠町を全国にPRしていきたい。 ■生産者、係機関と協力し、九州のお米食味コンクール、米・食味分析鑑定コンクール国際大会で優勝するブランド米づくりの実施 ・九州のお米食味コンクール等で、くす天空の輝き研究会で応募し、九州一の米を作る。その後、国際コンクールでも優勝するような米作りを行い、玖珠町の知名度を上げる。 ■農家所得の向上を目指し毎年、玄米30kg10,000円以上が農家の収入となる取組の実施 ・令和4年産の米の価格：6,100円 ⇒ 令和5年産：6,700円 ⇒ 令和6年産：11,300円 ⇒ 令和7年産：16,800円 - 当初、この取組が目標としていた、10,000円を概算金額が超えてしまったが、今後、もし金額が下がっていく事があっても、くす天空の輝きは、30kg10,000円以上農家に入るよう努めたい。 - そのためのブランド米にしていきたい。
感想（まとめ） ・市に活かせること等	・これまで農家が経験や勘に頼っていた米づくりをデータに基づく科学的な栽培を行うという側面もあり、圃場の状態をアプリで提供確認し、適切な管理と適切な時期に収穫するという判断ができる点はこれからの新しい農業の形として大きな可能性を感じた。また、農業に従事するためのハードルが下がったのではないかとこの見解をいただいた。こういった面でも当市への導入の可能性を感じた。 ・5年目の取組であり昨年R7年に「天空の輝き」を初出荷できたとのこと、これからが事業内容の本格運用であり今後の状況にも注視しながら取組を追っていきたい。 ・玖珠米は評判がよくブランド価値がもともとあったが、米の置かれている状況が年々変化し、米農家の減少と収入の減少に危機感を持ち新たにブランド米の取組を始めた点は地元米への思いの強さと米農家を守っていくとの思いを強く感じた。 ・人工衛星が圃場の状態を把握し、葉っぱの照り返しや緑の普及具合（よう緑値）など反射具合を指標化したものを数値化し、気象台からの天気と温度をミックスし出水予測やカメムシ防除などのさまざまな予測ができる点はとても驚いた。 ・当初は青森の「晴天の霹靂」の生産システムを比較対象としていたが、圃場面積や中山間地域の地形などによりより対応できるシステムとして「アグリルック」を導入した、この点は飯田市の中山間地域への対応といった面で活用の可能性があると感じた。 ・アグリルックの衛星データはヨーロッパの「センチネルⅡ」の衛星画像は無償で活用できるため、このデータを活用し気象データや現地の観測データを独自に計算し発育予測に活用しているとのこと、であり人工衛星の費用は会社としても一切かかっていない。予算面でも大きなメリットがあると感じた。 ・圃場の登録は町が担当している、そこからビジョンテックにてIDとパスワードを作成し町から生産者へ伝える方法を取っている。（モバイル版とPC版の両方を活用できる） ・システムの予測の信頼度と圃場の農作物の状況は昨年度の調査では、ほぼ合っている点はシステムの精度が高く評価できる点である。また、精度の高さをさらにあげるために、現場の状況を細かく入力しさらに精度を高めいる点には驚いた。（現在の誤差は前後3日位） ・「くす天空の輝き」の販売による生産者への還元は来年度の冬に予定されておりR7年産米については今年の冬に初めて清算されるため、どのようなメリットがありどのくらい還元されるかは、現在のところ把握できていない点は少し残念ではあったが、今後状況が分かれば確認したい。 ・（株）ビジョンテックに決定した要因として、中山間地域の状況を細かなデータ（1キロメッシュ）で撮れるため中山間地域でも精度の高い画像データが取れることが決め手となったとのこと、飯田市での活用を視野に入れた場合に当市の状況にもマッチできるのではないかな。 ・アグリルックは玖珠町専用ではなく、他の自治体でも活用可能とのこと、活用に期待が持てるのではないかな。

- ・予算面では、衛星データは無料、玖珠町では1年間で約150万円で運用しているとのこと。オプション等もあり自治体の取組みたい内容により金額は決まるため、詳細はビジョンテックへの問い合わせとなる。
- ・費用対効果の面では今後見えてくるところだが、やっと生産が始まったところであり、現在はブランドの発信やPRに注力しているところであり、将来的には利用者の費用負担など整理する必要性が出てくる可能性はあるとのこと。
- ・システムのデータはあくまで目安であり、その通りに実施しなければならないというわけではない、デメリットとして雲が多かったり曇天が続くとデータ更新が上手くいかないことがある、人工衛星のデータ取得頻度は5日に1回となっている。曇り空と衛星データ取得が重なるとデータ更新ができないこともある。
- ・システム自体は農業補助であり、主体は人間となる。

(3) この事業実施後の対応及び方向性

- ・人口減少における様々な課題が顕在化してきており、第一次産業である農業も担い手不足や遊休農地の拡大などが大きな課題となっている。今回学んだこの取組が飯田市の課題解決の糸口として取り組める点がないか。など、今後も様々な場面での質疑等を行う際の参考とし、今後の会派活動に役立てていく。
- ・今回の視察を参考とし、会派所属議員で一般質問を行うなど課題認識を持ち今後も調査研究を行う。
- ・農業分野については今後も会派として調査・研究を継続して行う。

会 派 名	飯田市議会公明党	支出伝票№.	
事 業 名	公共交通が届いていない地域でのグリーンスローモビリティの取組		
事業区分 (該当へ○)	①調査研究費 ②研修費 ③広報費 ④広聴費 ⑤陳情等活動費 ⑥会議費 ⑦資料作成費 ⑧資料購入費 ⑨人件費 ⑩事務所費		

(1) この事業の目的：どんな課題を解決するため あるいは誰・何を対象に何を意図するのか

大分市では公共交通が不便な過疎地域や中山間部における日常生活や観光での移動支援のため、低速で公道を走ることができる電動のグリーンスローモビリティが運行されている。飯田市においては高齢者の足の確保が課題となっており、中学校の部活動の地域展開により新たな移動手段が求められている。大分市での取組を学びグリーンスローモビリティ活用の可能性を探る。

(2) 実施概要

調査・研修の場合の実 施日時と訪問先・主催 者	日 時	訪問先・主催者等
	令和 8 年 6 月 30 日 10 時 0 分 ~ 12 時 0 分	大分市 都市計画部 都市交通対策課 参事補兼GL 佐藤 洋氏 主任 奈良 有希 氏

報告内容・実施したこと	1 視察先（市町村等）の概要 ・大分県のほぼ中央部に位置し、東九州の中核都市 ・人口470,427人(令和8.1.31) 面積502.39km² 高齢化率28.4%(令和5年度実績) ・長年にわたり瀬戸内海における海上交通の要地として栄え、街のあちこちに歴史が刻まれている ・高崎山をはじめ鎧ヶ岳、樺木山など山々に囲まれ、一級河川の大野川が南北に貫流しながら別府湾へ注ぎ、東部沿岸は天然の良港として豊予海峡に面する
	2 視察内容 ○「大分市地域公共交通計画」の策定の背景と目的 ・人口減少の本格化に伴い公共交通サービス需要の縮小や経営悪化、運転手不足の深刻化など、地域公共交通の維持・確保が厳しくなっている。更に高齢者の運転免許返納が年々増しており、受け皿としての移動手段の確保が重要な課題となっている ・このような状況を踏まえ、マスターズプラン（地域交通計画）を策定し、特に過疎地域などでは、地域の輸送資源を総動員して移動ニーズに対応する取組を促すため、持続可能な運送サービスの提供確保に資する取組の推進が求められている（令和2年11月27日法律改正） ・「大分市にとって望ましい公共交通のすがた」を明らかにするとともに、市民、交通事業者、行政の役割を明確化し、連携を図りながら様々な取組を推進する ・計画期間 令和4年4月～令和9年9月 ・計画区域 大分市全域 ○計画の位置づけ ・令和2年3月に策定した「大分市総合計画 おおいた創造ビジョン2024第2次基本計画」を関連する最上位の計画とし、「大分市都市計画マスタープラン」「大分都市圏総合都市交通計画」「大分市立地適正化計画」など関連する計画と整合を図り、地域公共交通のマスタープランとして位置づける ・路線バスの運行ダイヤの見直し等の地域公共交通利便増進実施計画などの特定事業については、引き続き調査・検討を進める ○これまでの大分市の地域公共交通の取組の検証 ・大分市都市圏における人の動きを把握し、更に実移動人口やその分布状況の把握を進めた結果、大分（都市拠点）を中心とした放射状の幹線軸の必要性が判明 ・取組事業の整理や評価指標の整理を実施した結果、17の評価指標のうち、10指標で目標未達成 ・大分市内路線バス・鉄道のサービス縮減。運転手不足（二種免許保有者の減少）。免許返納者の増加。 市民アンケートでは、外出時の移動手段は自家用車が8割以上。 ○公共交通を取り巻く課題 ・日常生活の移動（おでかけ）を支える公共交通のあり方としては、運転免許返納者が増加し、今後、公共交通が果たす役割が重要になる一方で、交通事業者を取り巻く環境は厳しい ・循環型バスやデマンド交通などの効果的な運航を行うとともに、取組事業の連携の強化が

	必要 ・まち（拠点）のにぎわいを創出する公共交通のあり方は、地域内循環、デマンド型交通など各地域の特性に合った交通モードの検討が必要 ・昼の時間帯については、公共交通利用者の確保に努めるとともに、公共交通サービスとの需給バランスの調査・検討が必要 ○グリーンスローモビリティの運行について ・市内3地区にて運行し、公共交通の行き届かないエリアを選定している ・電動で二種免許保持のドライバーにて運行し、時速20km以下で対面式車両を導入 ・運行は、平日のみであり土・日・祝日は運休としている。運賃は無料であり、運行ダイヤに従って高齢者に限らず利用されている ・地域公共交通と重複しないルートとし、あくまで補完ルート運行としている ・民間サービスが届きにくい過疎地域及び市内過疎地域において、交通量が少ないエリアを運行 ・事業費の一部へは過疎債を充当するなどし、無料運行としている ・地域に根付いたモビリティとなるよう、地域の方々等から意見徴収をしながら効果的な運行を努めている ・朝晩の通勤や通学時間は避け、交通障害などの原因とならないダイヤ（9時～16時運行）としている。よって、幹線等を除いたルート設定となっている ・運行3ルートともに、高齢者利用が全体の6割以上を占めているのが実態 ・車両の特性上、バッテリー残量を考慮したルート設定や運行エリアとなり、道路状況他の留意が必要となる ・特殊車両による維持管理及び修理に対して、費用と期間が必要となる。
感想（まとめ） ・市に活かせること等	・グリーンスローモビリティへ実車し時速20kmを体感したが、非常に速いという感覚であった ・リア二次交通として自動運転に変わる魅力があると感じたが、急傾斜地が多い飯田市にとって、エリア選定や運行管理をどうするか、課題と感じた ・ある程度平坦なエリアでの運行は条件となるものの、運行ルート上であれば、手を上げると何処でも乗ることができる ・ご利用者とも当日同乗することが出来たが、対面式車両でもあり乗降し易く、とても手軽に利用されていた。車輦内が市民同士のコミュニケーションを図る場ともなっており、外出のきっかけづくりにも役立っている（高齢者等の孤独・孤立対策） ・利用運賃無料について過疎債などの活用は視野に入れるものの、市民の足という視点では、長く利用継続を考えた時、様々な検討が必要と感じた。但し、有料とすると、緑ナンバー（営業車扱い）となり代替車輦の準備など管理面での制約もあり、追加費用等が発生する ・維持管理に当たっては、3ヵ月点検、1回/年の点検が必要となる ・運行による渋滞防止へ、該当ルートへグリーンスローモビリティ運行ルートと道路標示をするなど地域理解の促進を図っている

（3）この事業実施後の対応及び方向性

○飯田市における公共交通のあり方へのヒントとしたい ○会派として調査継続中

会 派 名	飯田市議会公明党	支出伝票No.	
事 業 名	杵築市「移住・定住促進施策」の取組		
事業区分 (該当へ○)	①調査研究費 ②研修費 ③広報費 ④広聴費 ⑤陳情等活動費 ⑥会議費 ⑦資料作成費 ⑧資料購入費 ⑨人件費 ⑩事務所費		

(1) この事業の目的：どんな課題を解決するため あるいは誰・何を対象に何を意図するのか

人口減少に伴い全国的な課題の一つである空き家対策について、杵築市では城下町の景観を維持しつつ、空き家を観光拠点や移住者向けの宿泊・交流施設へと再生するといった好事例から取組を学び、飯田市における空き家の活用への糸口を探る。

移住・定住の好事例を学び、人口減少に対する当市の取組の良さや改善点を探る。

(2) 実施概要

調査・研修の場合の実 施日時と訪問先・主催 者	日時	訪問先・主催者等
	令和 8 年 6 月 30 日 14 時 30 分 ～ 16 時 30 分	杵築市 協働のまちづくり課 課長 古庄 顕三氏 課長補佐 後藤 一水氏

報告内容・実施したこと	1 視察先（市町村等）の概要 ・大分県の北東部、国東半島の南部に位置し総面積は280.08km²。 ・人口25,496人(令和8年3月末) 高齢化率39.97% 合計特殊出生率1.22% 自然増減(390人減少) 社会増減(144人減少) 大分県へのJターンが多い。 ・東に伊予灘、南に別府灘、東南部は眺望の美しい海岸線、北は両子山から連なる山々、西は鹿鳴越山系、雲ヶ岳等、北西部は200～600m級のなだらかな山々に囲まれた自然豊かな山間地。 ・平成17年10月1日、旧杵築市、旧速見郡山香町、旧西国東郡太田村の三市町村が合併して新「杵築市」が誕生。 ・大分自動車道・宇佐別府道路の整備をはじめ、大分空港道路と宇佐別府道路を結ぶ日出バイパスが完成し速見ICをアクセスとしての東の大分空港、西の県西地域や福岡市、南の大分市や県南地域 北の中津市や北九州市を結ぶ高速道路交通網として今後一層の発展が期待される。 ・お茶の名産地。
	2 視察内容 ○移住・定住支援(令和8年度 移住・定住促進補助金) ・定住促進補助金①移住応援給付事業補助(県外移住者)②定住促進補助(県内転入者・市内転居者) ・空き家利活用補助金①空き家購入補助②空き家改修補助③家財処分補助 ・移住支援事業補助金(県外就業移住者) ・移住促進マイカー取得補助金(県外子育て移住者) ・IUJターンの単身世帯、子育て世帯に合わせた支援や、移住後の生活に寄り添ったマイカー補助等取組が多く見られ参考になった。 ・移住体験事業①移住体験プログラムは移住者が経営する経営する市内の農家民泊2施設と市営施設1か所を移住体験(農業体験・先輩移住者交流・空き家見学・暮らし体験・子育て施設見学)利用者の宿泊施設として利用する場合、最長3泊まで(1人1泊4,000円上限)②お試し移住体験(太田ハウス)市営住宅の1戸を改修、県外からの移住検討者向けに最長30泊まで利用できるお試し移住体験用の宿泊施設(利用料1泊2000円15泊から30泊まで一律30,000円) ・どちらの体験事業も利用世帯は増加し、移住実績は令和7年で全世帯人数133名。子育て世帯35人と効果を上げている。 ・子育て世帯の移住は剣道の強い学校への進学目的も含まれている。

	・若者や若年女性人口の減少は飯田市と同様で、愛着はあるが大分市等へのJターンが多い現状もある。 ○空き家の現状と空き家活用による地域や住民の変化について。 ・令和3年度(9月～11月)に地図情報会社「ゼンリン」に委託して市内全域の空き家調査(外観調査)を実施。令和4年度(7月～8月)行政区の区長と市職員による現状確認などの補足調査施行。太田地区では令和6年に住民自治協議会と区長等で構成する「太田地域空き家対策推進会議」を設立。空き家所有者に空き家バンクへの登録を促すサポーター2名を任命。空き家バンクの登録推進に加え空き家の内見の際にも同行し地域情報を提供している。 ○空き家を活用した地位活性化の事例。 ・杵築市の伝統的建造物指定地域内では元武家屋敷の空き家を市が所有者から買収・寄贈を受け市が改修して観光文化施設として一般公開している。個人が空き家を購入改修し民泊施設やカフェを営業しているケースもある。 ○市として空き家所有者へのアプローチ方法や支援策はどのようなものがあるか。 ・空き家利活用促進のため、空き家バンクの登録推進・固定資産税納入通知書(12,000通)発送時に空き家バンク登録に関するチラシと空き家等の適正管理に関するお知らせのチラシを同封・家財処分に対する補助(空き家バンクへの登録推進対策)空き家バンクの登録の際に市内の事業者を利用して家財処分をする場合上限10万円(補助率1/2)を助成 ○空き家の情報提供や空き家を探している方とのマッチングはどのようにしているか。 ・マッチングの流れ①空き家バンクのホームページから登録物件を検索②空き家バンク利用登録申請書の提出③空き家バンク物件内見申し込み④内見日程の調整⑤物件の内見⑥交渉の見込み⑦交渉・契約⑧成約
感想(まとめ)	○住宅所有者がご存命のうちにアプローチをしていく事も大切と思うが手法や方法での工夫は。 ・高齢者の市民向けに作成したオリジナルのエンディングノート「きつきネバーエンディングノート」は財産に関する項目も整理できるので医療介護担当部署が出前講座や相談窓口の際にエンディングノートを提供し就活準備の取組も行っている。 ○宅建業界や民間事業者と連携の状況。 ・不動産業者が扱う個人の一般媒介物件であれば、空き家バンクへの登録も可能。民間事業者とは空き家バンク事業を介して必要な情報交換、内見などの連携をしている。 ・大分県から委託を受け「空き家問題の総合的な相談窓口」を運営している「NPO法人空き家サポートおおいた」は空き家の管理活用、処分だけでなく、空き家予防や移住者とのマッチングを建築士弁護士、司法書士など多様な専門家が、複雑な悩みに対してサポートしており、県や市町村と連携して空き家に関する相談支援を行っている。 ○特定空家についての対応。 ・特定空家も個人の財産であるため、所得者等が自らの責任において適切に管理し、改善・解決を図ることが原則。杵築市では、これまでの対応で勧告、命令、行政代執行に至るケースはなく、助言店指導の段階で所有者や相続人の理解を得て、取り壊し等による是正が実現している。 ○現状の課題について ・空き家の増加と適正管理及び利活用。所有者の高齢化、遠隔化に伴う管理の脆弱化。相続等による所有意識の希薄化・管理責任の認識不足。経済的負担の重さ(維持管理・解体費)所有者不明、管理不全空き家の対応の困難性等を挙げられていた。飯田市においても課題は同様であるため、今回の杵築市の空き家対策を参考に、継続した取組が重要である。 ・若者や若年女性人口の減少は飯田市同様に顕著である。子育て世代の支援の充実や空き家バンクによる県内外からの移住定住事業を今後も継続させていくことが大切であることを学んだ。
(3) この事業実施後の対応及び方向性 ○飯田市における「移住・定住施策」や「空き家の課題」への対応の参考としたい。 ○会派として調査継続中。	